

いった。

昭和二十年七月

有川大尉、山口、大村軍曹四機、屏東上空の防空任務を命ぜられ出撃。屏東上空にて二時間上空掩護をして帰還する。

昭和二十年七月

シナ海海岸偵察のため、四機出撃。途中、悪天候のため三機帰還。木村曹長のみ無事任務を完遂して、夜間飛行にて帰還し、師団長より賞詞を受ける。

昭和二十年八月十五日朝

飛行機試運転、中国上海飛行場経由、北朝鮮に行くこととなったが中止の命あり。正午、天皇陛下の玉音放送あり、終戦を知る。

昭和二十年八月二十日

早朝二時頃、部屋にて銃声聞き、起きてみると玄武特攻隊要員の少飛一〇期生の栗木軍曹が拳銃をくわえて自決していた。

昭和二十年九月

台中の奥地の埔里に入り自活を始める。熱帯熱マラリア(体温四二度)にて入院。退院後、

復員まで炊事班長を務める。

昭和二十一年二月十九日

復員。鹿児島港に上陸。部隊解散、帰郷。

(大村 記)

父と赤紙

私と特攻隊

福井県 矢部 善 昭

まえがき

私は公民館長時代から、地域の「かたりべ」として生涯学習に携り、高齢者、青少年、婦人グループ、小学校児童達に、戦争体験、戦時の耐乏生活、B29空襲、学童疎開、原爆被害、劣勢な科学校戦など模型や紙芝居で話をしている。同時に当時の国家観、親子関係、人間の絆などすべてが否

定されるものでないことも併せ、これからの日本人として大切な心の問題も提起している。老兵には後世のためにまだ出番があると考えている。

予科練志望とわが父親

私は武生中学校四年の時、海軍甲種予科練に入隊した。動機は学校の勧めと父の一言によるものであった。私自身は子供時代から図画が得意なことから、将来は画家を目指し、美術学校進学を密かに考えていた。中学の配属将校の教官から「頭の良い者は陸士、海兵あとは予科練、残った奴は一銭五厘（赤紙徴兵）」と言われ、学校あげて戦時一色の世の中であった。

当時役場の兵事主任を勤める父も「絵画とは何事ぞ、兵学校が駄目なら海軍に一兵卒で入れ！」と息子の考えやその力量を知らない父の命令である。予科練に入る唯一の希望は飛行機に乗ることだけであった。

その父とは、大正時代の海軍退役軍人で砲術上

等兵曹、善行章四本、軍艦「対馬」「新高」に乗り込み、第一次世界戦争に従軍の後、海軍砲術学校教官、兵学校砲術指導員をしていた。退役後、村役場に奉職、志願兵募集や徴兵事務、赤紙召集令状発令の責任者であった。国策に沿って熱心に業績を上げていた父は、昭和十七（一九四二）年一月二十三日、海軍大臣（嶋田繁太郎）より表彰状を受け、『ここに敢闘者あり、県下随一の海軍育ての親』として福井新聞にも軍服姿で報道された。さらに一人息子が海軍入隊したことで村で評判になった。

美保航空隊から峰山航空隊

昭和十八年十月一日（第十三期・前期）、美保空には一、二〇七人が入隊した（土浦空など合わせ全国で一〇、八八九人が入隊）。美保航空隊司令は『月月火水木金金』の作詞者・高橋俊策中佐である。

「将校練習生」なる名のもとに、待ち受けてい

たものは厳しい海軍精神教育だった。吊床訓練、駄け足、ビンタ、バスター罰直が続いた夜、ハンモックの中で、ここへ送り出した父の顔が浮かんだ。親父を睨みながらいつの間にか眠ってしまう夜があった。

十カ月の厳しい基礎教育を卒業し、昭和十九年八月、待望の飛行訓練航空隊への進級となり、操縦専攻として峰山航空隊に一二〇人が転出することになった。生まれて初めて九三式陸上中間練習機、通称「赤とんぼ」に乗った。ここは本格的パイロット養成であり、空中での命がけの訓練は美保子科練以上に苛酷であったが、自らも早く一人前になる目標があり、体は辛いが心には光明があった。

また、峰山航空隊で、我々は歴戦経験豊富な素晴らしい教官、教員、先輩に恵まれた。〇飛行長、S分隊長、K先任教員（のち飛行曹長）、I先任教員など、厳しい技術指導のなかで、次第に慈父、兄貴、親友、そして家族的人間関係が培わ

れていった。さらに後日の特別攻撃隊編成でこれが一層深まり、半世紀経た現在も、峰山空出身者共通の絆となっていることは特筆すべきことである。

九三式練習機特別攻撃隊編成

さて、我々第三十九期生は「赤とんぼ」で編隊飛行、特殊飛行（宙返り、横転、垂直旋回）もマスターし、単独飛行もOK、次は『ゼロ戦』など実用機の訓練段階に思っていた矢先、軍上層から、本土防衛体制への転換という指令が出た。戦局が切迫しつつあるので、すべての練習を止め、全航空戦力を特攻作戦に展開せよということである。

峰空保有の飛行機にあわせて、特別攻撃隊員九十人が第一次選考された。練習機は迷彩塗装され、二五〇キロ爆弾装着用に改装された。ところでこの旧型練習機で敵艦に体当たり？ ベテラン先輩達は首を傾げた。その性能を「ゼロ戦」と比

較すると、

ゼロ戦Ⅱ金属一枚低翼／最高時速五三三キロ、

エンジン一五〇〇馬力に対して、

九三式練習機Ⅱ二枚翼一部布張り／高速時速二

一四キロ、エンジン三〇〇馬力、

と、まさに大人と子供である。これで敵の集中砲火を潜り抜けることが可能だろうか。疑問はあるがとにかく至上命令である。

急降下訓練が開始された。歴戦のベテラン教官もその編成チームに入り、四機編隊のペアを組んだ。仮設目標に急降下し、目測を誤り海中に突っ込んだり、夜間飛行で山に墜落したり、犠牲者が続出し、まさに死と紙一重の訓練が続いた。

やがてこの編成隊は「神風特攻隊飛神隊」忠部隊、武部隊、礼部隊、義部隊と名付けられ鹿屋、岩国の出撃基地に空路転出した。峰山空発進時に使用された『神風特別攻撃隊飛神隊』と書かれた幟は現在舞鶴海上自衛隊内記念館に保管されている。

ところで神風作戦初期、比島レイテでゼロ戦特別攻撃隊により大きな戦果をあげて以来、度重なる出撃により新鋭機が消耗し、次第に九九艦爆、〇式水偵、九六艦爆など旧式機になり、さらに低性能の練習機（赤トンボ、白菊）の動員となり、我々の出番がきたわけである。

戦後米軍の記録による特別攻撃機二八〇〇機（搭乗員約三七〇〇人）の命中率はたった一八パーセントだったとされている。初期の効果に比較すると戦争末期は飛行機が古く搭乗員も未熟速成になる一方、米軍は防空システムの精度向上、新砲弾開発で日本機はほとんど撃墜される運命であった。多くの若者が死んだ、我々も統こうとした何のために？ だれのために？

峰山空から神町航空基地へ転出

第二次編成の私達三十人は、山形県神町基地に着任した。峰山航空隊での実績が認められ、直ちに特別攻撃態勢継続の通達があった。一部の者は

ロケット特攻機「秋水」要員に抜擢され「桜花部隊」へ転出した。我々特攻隊員は計画に基づき、九三式練習機に爆装し、降爆訓練は夜間を主力とするものが多くなった。米艦載機の空襲を避けながら、逐次出撃態勢を整えていた。

我々の任務は当時の海軍作戦指令によれば、第十航空艦隊傘下で本土決戦の東北対策、ソ連軍上陸に備えるとしていた。私の専用機六五一号を整備しながら、いよいよ機が迫りつつあると感じ「とにかく死ねば良いのだ」と自問自答、平静な心境で時を待つ日が続いた。

そんなある日、突然、父がはるばる福井から面会に来た。航空隊から連絡があったらしい。飛行場の隅で二十分程面会したが深い話はせず、今から搭乗する自分の機体ナンバーを教えた。父は下から手を振るからと言った。これが「最後の会話」かも知れないと思いがら笑顔で別れた。帰って行く父の後姿は以前より一周り小さくなったような気がした。

八月に入ると日本近海にたむろする米機動部隊から艦載機の基地攻撃が烈しくなり、飛行場にあった九六陸攻など大型機一六機が目の前で撃破炎上され、滑走路も穴だらけになった。我々の小型飛行機は近くの山林に隠蔽し無事であったが、呆然自失の我々に、ソ連軍が上陸すると搭乗員は処刑されるとの噂が流れた。「死んだ筈の命」が急に惜しくなり、着の身着のまま戦友M君（滋賀県）と貨物列車に飛び乗った。これが特攻隊員の末路か、暗い貨車の中で眩きながら故郷へ帰る二人の「凱旋」の姿であった。

父の残した赤紙

山形県神町から貨物列車がようやく鯖江に着いた。奇しくも八月二十五日はわが誕生日、十九歳の早朝である。玄関を開けた。父は黙って迎え入れ、早速仏壇に参り帰宅を報告した。父の姿にはかつての『海軍育ての敢闘者の面影』はなく、すっかり疲れきった老人の姿であった。以後、海

軍の話をしなくなった父は七十三歳で他界した。

後年、父の年忌日に仏壇の奥に多数の赤紙受領証が置いてあるのを発見した。その数三九一枚、昭和十二年から太平洋戦争末期まで九年間、六十五人の戦死者を含め、新横江地区の赤紙の全数である。

調査によると、日本が敗戦のとき役場には軍関係書類はすべて焼却指令が出されたが、当時役場の兵事係であった父は、自分が取り扱ったこれら赤紙は、皆尊い「命の代償」であり、とても焼却処分はできないとして密かに持ち帰ったものと判明した。

年次別には昭和十八〜十九年頃は、一家の柱である四十歳以上の人にもほとんど発令されている。一家で二人、三人戦死している家庭もある。いまでもこの一枚一枚から悲壮な叫びが聞こえてくるような気がする。

父の思いも含め私はこれを大事に保管して置こうと思う。(昭和四十八年八月十三日福井新聞に

記載)

今私は生きている。手許に、あの時着用した飛行服と飛行手帳、それに父が出撃用にと贈ってくれた軍刀がある。将来、これをどうするか後世の人が考えればよい。再び過ちを起こさないために、この『過去の遺物』が警鐘となれば幸いである。

【解説】

〔経歴〕

昭和二年八月二十五日、生まれ

昭和十五年 県立武生中学校に入学

昭和十八年十月一日 甲飛予科練十三期(前期)

鳥取県美保航空隊に入隊

昭和十九年 飛行術練習課程(飛練三十九期操

縦専攻) 京都府峰山航空隊

昭和十九年六月 特別攻撃隊編成、山形県神町

航空隊(通算飛行回数一八九回、延時間六十

六時間)

昭和二十年 「終戦」

昭和二十一年 福井工専に入学（染色科学科）

昭和二十三年 地元S織維会社に入社、技術畑

で四十三年勤続、六十五歳で退職

平成六年 鯖江市教育委員会より新横江地区公

民館嘱託館長拝命、六年間勤務後退任

平成十三年 鯖江環境エネルギー委員NPOセ

ンター（エコプラザ委員）

平成十四年 鯖江新横江地区老人クラブ連合会

長

平成十五年 福井県美保空会（甲飛会）役員